

# 一 位置と環境

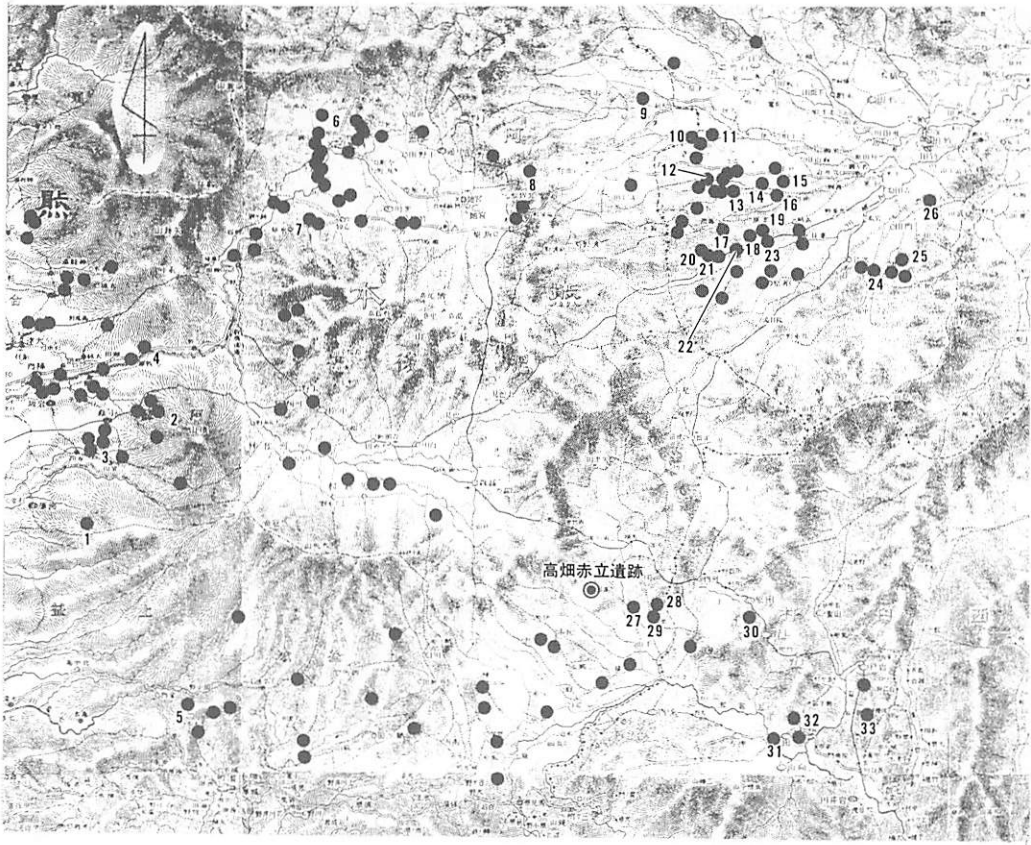
## 1. 阿蘇の地理と歴史的環境

阿蘇とは、一般的に中央火口丘と、それによって分断される阿蘇カルデラ（いわゆる阿蘇谷と南郷谷）および、それらを取り囲む外輪山の裾野一帯の地域を示している。阿蘇の火砕流の噴出は、およそ30万年前の阿蘇誕生から現在までの間に大きくみると4回、やや細かく分けて8回であったと考えられている<sup>(1)</sup>。一回の噴出量は数10km<sup>2</sup>であり、阿蘇の陥没カルデラはこの4回の火砕流堆積物によって形成された。カルデラは、厚いところで比高800m以上にも達し、南北25km、東西18km、面積380km<sup>2</sup>という広がりを見せている。高千穂峽や蘇陽峽、内大臣峽などの断崖は、この火砕流の堆積物を川が深く浸食してできたものである。また、現在の外輪山は、カルデラ形成以前に存在した小火山群のうち陥没しなかった部分である。外輪山から海拔標高1000m以下のなだらかな高原が、北は久住連山、東は祖母・傾山系、南は九州山地へと続く。

阿蘇カルデラは、年平均気温が約13℃（熊本県阿蘇郡阿蘇町内牧）で熊本平野に比べ約3℃低く、年間降水量は2631mm（同じく内牧）で、熊本平野の約1.3倍に当たる。現在、カルデラ内には8780ヘクタール（うち水田6350ヘクタール）の耕地が開ける。一方、阿蘇外輪山は年平均気温10～11度、年間降水量約2500mmである。植生は、火山灰、火入れ、放牧のために遷移が抑制された草原が中心であるが、現存している自然林を観察すると、ケヤキ、マツ、クヌギ、クリなどの照葉樹林帯から落葉広葉樹林帯への過渡的な植物相がみられる。また、阿蘇外輪山は高冷地で、保水性のない土壤であるため、現在畑作中心の農耕が行なわれている。

阿蘇の水系は複雑で、外輪山北部の熊本県阿蘇郡小国町から筑後川の支流、端辺原野から菊池川、外輪山南西部から緑川が流れを発する。高畑赤立遺跡と関係の深い外輪山東部・南東部の地域では、熊本県・大分県・宮崎県にまたがる祖母山を水源とし、菅生台地を経て、別府湾へと通じる大野川、宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町に流れを発し、阿蘇郡蘇陽町、高森町、宮崎県西臼杵郡高千穂町を通り、日向灘に注ぐ五ヶ瀬川がある。阿蘇カルデラ内においては、阿蘇谷に黒川、南郷谷に白川が流出し、この二河川は阿蘇郡長陽村内で合流して白川として熊本平野を横断し、有明海に注ぐ。以上のように、阿蘇は九州の代表的河川の分水嶺をなしている。次に、今回調査を行なった高畑赤立遺跡の位置する蘇陽町の弥生時代における周辺遺跡について、河川の流域ごとにみていきたい。

黒川・白川流域は、縄文時代とは異なり、遺跡は外輪山山麓だけでなく、稲作の普及と耕地の拡大、集落の分化に伴って微高地や河川の自然堤防上に立地する。阿蘇町前田遺跡や同陣内遺跡の石庖丁の存在、同宮山遺跡・陣内遺跡の粃や稲のプラント・オパール<sup>(2)</sup>の検出により、このような立地の変化は弥生時代中期後半以降であることが示唆されている<sup>(2)</sup>。稲作がもたらされるまでは、縄文時代的な狩猟・採集や畑作が行なわれたと思われるが、山を降りて稲作を行なう遺跡と並行し、依然として外輪山山麓で縄文時代的生活を続けるものもある<sup>(3)</sup>。この



0 10km

磨製石鏃出土遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	備考
1	谷頭遺跡	熊本県阿蘇郡西原村大字河原	未製品を含む。
2	櫛ノ平遺跡	〃 大字鳥子	
3	別辻遺跡	〃 大字小森	
4	瀬田裏遺跡	〃 大津町大字瀬田裏	
5	天神森遺跡	〃 上益城郡矢部町大字天神森	
6	陣内遺跡	〃 阿蘇郡阿蘇町大字西湯浦	
7	下山西遺跡	〃 大字乙姫	
8	大門遺跡	〃 一宮町大字三野	
9	下長尾野遺跡	〃 産山村大字下長尾野	未製品を含む。
10	内河野遺跡	大分県竹田市大字久保	未製品を含む。
11	上畑遺跡	〃 大字上畑	未製品を含む。
12	上菅生遺跡	〃 大字上菅生	未製品を含む。
13	平井遺跡	〃 大字小塚	未製品を含む。
14	石井入口遺跡	〃 大字菅生	未製品を含む。
15	小園遺跡	〃 大字小園	未製品を含む。
16	田原遺跡	〃 大字戸上	未製品を含む。
17	政所西遺跡	大分県直入郡荻町大字政所	未製品を含む。
18	寺ノ前遺跡	〃 大字新藤	
19	馬場遺跡	〃 大字馬場	未製品を含む。
20	古賀遺跡	〃 大字鎌渡	未製品を含む。
21	蜘蛛子遺跡	〃 大字桑木	未製品を含む。
22	仏面遺跡	〃 大字栢原	
23	谷尻原遺跡	〃 大字馬場	
24	辻原遺跡	〃 竹田市大字長小野	
25	太田原遺跡	〃 大字太田	未製品を含む。
26	小高野遺跡	〃 大字小高野	未製品を含む。
27	前畑遺跡	熊本県阿蘇郡高森町大字芹口	未製品を含む。
28	男原遺跡	〃 大字芹口	未製品を含む。
29	柿迫遺跡	〃 大字芹口	未製品を含む。
30	湧糸平遺跡	宮崎県西臼杵郡高千穂町大字田原	未製品を含む。
31	押方C遺跡	〃 大字押方	未製品を含む。
32	宮ノ前第2遺跡	〃 大字三田井	未製品を含む。
33	梅ノ木原遺跡	〃 大字三田井	未製品を含む。

第1図 弥生時代遺跡分布図

縄文時代的な遺跡では、搬出用の石庖丁が製作されるなどして、稲作を営む遺跡との相互的な関係が窺われる。阿蘇町下山西遺跡は、微高地上に立地する大集落である。こうした大集落には鉄器や青銅器がみられ、阿蘇谷の中心的集落をなすと思われる。土器をみると、熊本地方の黒髪式、野部田式をはじめ、「免田式」長頸壺、北部九州の須久式、大分の安国寺式の壺が見受けられ、熊本地方や大分地方から北部九州までの広範な交流関係があったことを示している。このような様相は、阿蘇郡長陽村、西原村、菊池郡大津町といった外輪山の外側においてもみられ、中期から後期に遺跡が増加し、カルテラ内と基本的には同じ性質を持っている。西原村谷頭遺跡のように石器を製作する遺跡が存在し、石庖丁の出土する西原村下桑鶴遺跡のような農耕を行なう遺跡との相互関係が想像できる。しかし、大津町西弥護免遺跡では、例えば石鏃はなく、鉄鏃のみが出土するというように、鉄器の保有が顕著である。鉄器の保有率という点においてカルテラ内とは差が見受けられる。

大野川上・中流域は、大分県の平野部と比べて弥生時代前・中期には遺跡が少ない。前期は、大分県直入郡久住町内畑遺跡、竹田市小高野遺跡が確認され、縄文時代晩期以来の刻目突帯文甕と板付系の土器が主流である。板付系の土器は筑後川上流ないし熊本平野を経て流入したことが指摘されている<sup>(4)</sup>。中期に入ると、直入郡久住町石原遺跡、竹田市田頭遺跡、同石井入口遺跡、同小園遺跡などで住居址がみられるようになる。土器は、平野部で盛行した下城式の壺・甕に加え、熊本地方の黒髪式の壺・甕・高杯の流入も認められ、大分平野や熊本地方と関係を持っていたことが窺われる。

後期になると遺跡が爆発的に増加し、菅生台地や萩台地を中心に集落が発達する。集落址は、竹田市石井入口遺跡、同小園遺跡などの中核的大集落と、その周辺にある竹田市開拓14号遺跡などの小集落があり、中核的な集落を中心に谷によって区切られたひとつの独立した台地上に営まれるのが特徴である。大集落は存続期間が長く、石井入口遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期まで存続するほどであり、鏡や鉄器の出土率が際立っている。生業としては狩猟・採集、漁撈、畑作が行なわれていた。後期の土器は、この時期に特徴的な安国寺式土器が国東半島、大分平野、大野川流域に分布する。ただ、大野川上・中流域にみられる安国寺式複合口縁壺は、この地において製作されることはなく、持ち込まれたものと考えられている<sup>(5)</sup>。このような壺に対して甕は地域性が顕著であり、平野部ではハケ目調整甕、大野川上・中流域では粗製甕というような差異が認められ、さらに粗製甕は大野川中流域では工字沈線文、上流域では工字突帯文が施される。その他に、肥後系の壺・甕（野部田式）や「免田式」長頸壺もみられる。また、器種は壺・甕が主で、小型の土器はほとんどないという特徴がある。後期は、中期と同様に大分平野や熊本地方との交流が窺えるが、一方で甕にみられるように地域差が明確になっていくことが分かる。

五ヶ瀬川上流域の外輪山南東部の蘇陽・高森町では、縄文・弥生両時代の遺物が出土または採集されるために、縄文・弥生時代を通じて同一地点に遺跡が営まれる傾向があったと考えられている<sup>(6)</sup>。蘇陽町赤立遺跡、同戸石平遺跡、高森町柿迫遺跡、同前畑遺跡では、磨製石鏃

の未製品や複合口縁壺（安国寺式）が認められ、さらに蘇陽町の遺跡には工字文突帯甕や肥後系の壺・甕（黒髮式・野部田式）がみられる<sup>(7)</sup>。まだ高森町の遺跡の実態は明らかではないが、このように当地では大野川流域や熊本平野部との交流があったことが分かる。ただ、赤立遺跡では肥後系の土器が中心に使われているため、肥後との関係がより密であったと思われる。しかしその一方で、煮沸具には特に壺が用いられるという機能の逆転がみられる<sup>(8)</sup>。土器の使用法について当地は独自性が強いということが言えよう。次に、高千穂地方は前・中期は遺跡に乏しく、遺跡の調査報告が明らかではない。後期以降に、高千穂町薄糸平遺跡、同高千穂高校遺跡などがみられ、工字文突帯甕や複合口縁壺（安国寺式）がみられ、大野川上流域との関係が窺える。

以上の地域を概観すると、中期後半以降、特に後期から遺跡が増加する特徴がある。阿蘇カルテラの黒川・白川と阿蘇外輪山の太野川上流域・五ヶ瀬川上流域の2つの地域では、土器によりこれらの地域間交流と独自性を知ることができる。生業形態は、カルテラ内が水稲耕作中心で、外輪山部が畑作と狩猟・採集というように生業形態に大きな差が窺われる。

## 2. 高畑赤立遺跡周辺の石器製作址

高畑赤立遺跡は、五ヶ瀬川の多くの支流が北西―南東方向に区切る狭歪な舌状台地のひとつに位置する。一般に外輪山部の遺跡は、こうした河川に仕切られる舌状台地上に立地する傾向がある。赤立遺跡周辺は、チャートなどの石器素材の調達が容易な地域であり、当遺跡が石器製作址であることは前回報告で述べられている。ここでは、今後の弥生時代の石器製作址研究の糸口として、現時点で判明している阿蘇を中心とした地域の石器製作址を紹介したい（第1図）。

（今村）

### 註

- (1) 松本輪郎「阿蘇の成り立ち」『えとのす』22 新日本教育図書 1983年
- (2) 島津義昭「阿蘇の先史時代」『えとのす』22 新日本教育図書 1983年
- (3) 阿蘇町教育委員会『史料阿蘇』1978年
- (4) 清水宗昭・玉永光洋「大野川上流域の古代文化」『えとのす』22 新日本教育図書 1983年
- (5) 小柳和宏・三辻利一「大野川流域における土器の移動～弥生土器胎土の蛍光 X 線分析～」『おおいた考古』2 大分県考古学会 1989年
- (6) (3)に同じ。
- (7) 山下志保「熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡―中九州山岳地帯の弥生時代をめぐって―」『九州考古学』第67号 1992年
- (8) 甲元眞之「地域と中枢地帯」『考古学研究』第36巻第2号 1989年  
山下志保「熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡―中九州山岳地帯の弥生時代をめぐって―」『九州考古学』第67号 1992年

## 二 調査の概要

高畑赤立遺跡は、1987年蘇陽町教育委員会によって第一次調査が行われ、1号から5号までの住居址の存在が確認され、そのうち2号住居址が完掘された。第二次調査は1994年に蘇陽町誌編纂委員会の委託を受けて、熊本大学考古学研究室によって行われ、先の調査で確認されていた1号および3～5号と、中央広場と考えられていた部分に発見された新たに6号住居址が発掘された。また、3号住居址のそばに1号土壌を検出した。ここでは第一次、第二次調査の概要について記していきたい。

### 1. 過去の調査概要

#### 1号住居址

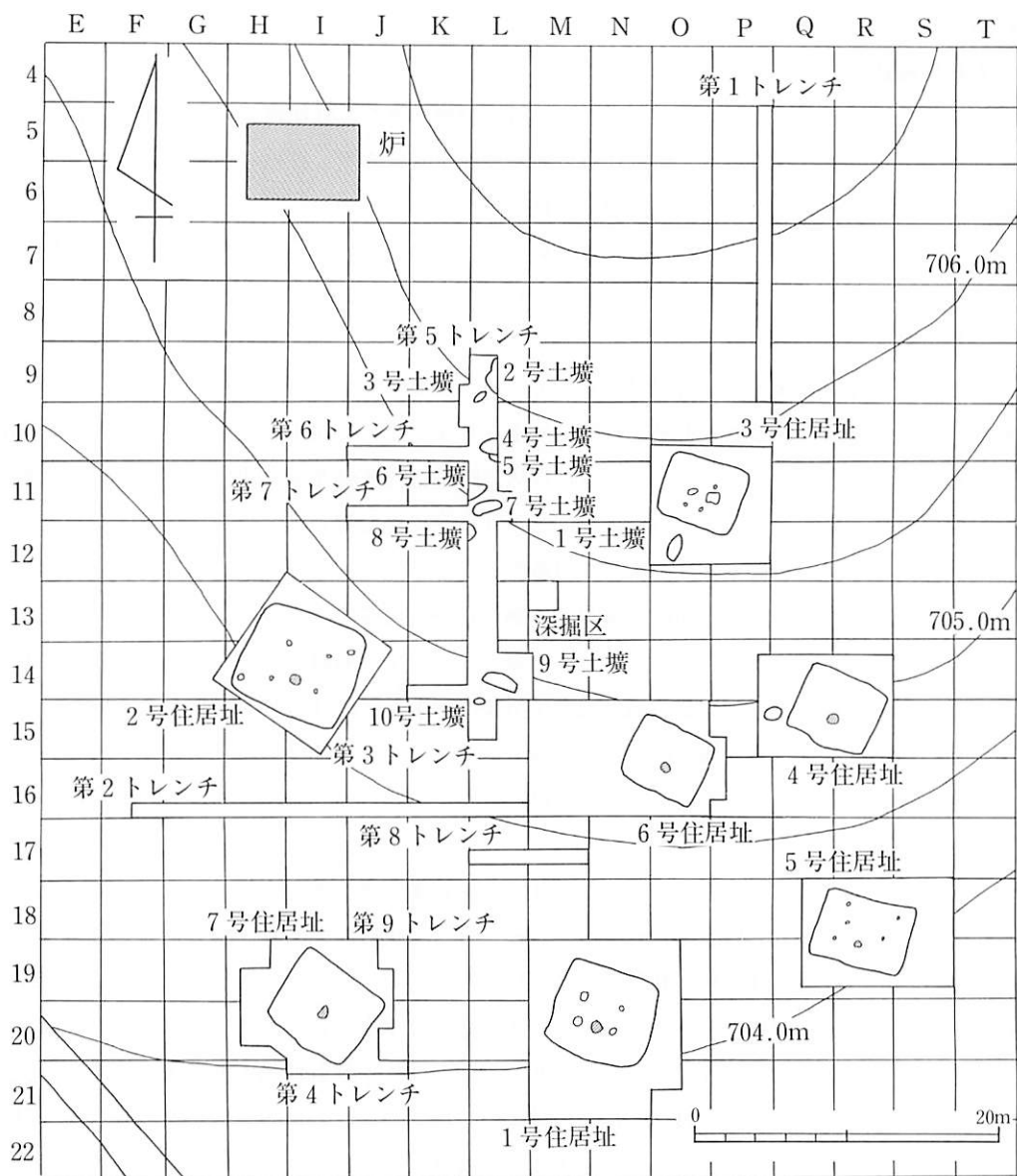
1号住居址は、当集落址の南側に位置する。埋土は5層に分層でき、それぞれⅠ層（黒色土層）・Ⅱa層（褐色土層）・Ⅱb層（褐色土層）・Ⅲ層（暗褐色土層）・Ⅳ層（黄褐色土層）である。Ⅱa層とⅡb層は焼土の広がりによって隔てられ、Ⅱb層上面を二次的利用面として捉えた。住居の構造は、主軸を北々東—南々西で、平面は長方形である。なお、1994年に報告された当住居の長軸は、東壁が不確かなために短くなる可能性がある。炉が住居址中央のやや南寄りから検出されており、炭化物および焼土を多く含む。柱穴は中央付近に4つ検出されている。その他に、炉のそばと北壁付近よりピットが各1つ検出されたが、その性格は不明である。出土遺物を見ると、土器はほとんどが甕であり、石器にはチャート製の打製石鏃や輝緑凝灰岩製の磨製石鏃、砥石・石皿などがみられた。また集落址内で唯一鉄器が出土した。

#### 2号住居址

2号住居址は、集落の北西側にあり、全7基の住居址中で最大の面積を有するため、当住居址内において中心的役割を担った遺構と考えられている。埋土は凹レンズ状堆積をなしており、7層に分層できた。住居の構造はほぼ方形をしている。柱穴は、住居内の東西隅付近に2つの主柱穴と、その内側に4つの副柱穴が検出できた。炉は、住居址の中央からやや南西寄りに検出された。また、炉址の南側には2カ所のピットが確認されたが、詳細は不明となっている。遺物はほぼ完形の壺や甕の口縁部片を含む土器片が多数出土し、弥生時代後期前葉に比定される。また、石器では、チャート製や黒曜石製の磨製および打製石鏃がみられ、（頁岩製）の石庖丁、チャート製の削器・打製石斧、砂岩製の砥石などが出土した。2号住居址は、炭化物のひろがりが見られ、二次的利用の可能性が示唆されている。

#### 3号住居址

3号住居址は本集落址内において最も北に位置している。埋土は1号住居址の場合とほぼ同じくⅠ層からⅣ層までの4層に分層された。住居の構造は、主軸方向を北々東—南々西とし、平面は長方形である。柱穴は5つ確認されており、住居址の中心に向かってわずかに傾斜しているのが特徴である。Ⅲ層の上面より多量の遺物・炭化物・炭化材が出土しており、炉を確認する事はできなかったものの、その周囲に円形に配された大小の礫とその周辺の焼土が、炉の



第2図 遺構配置図

検出住居	長軸×短軸 (床面積)
1号住居址	6.9m? × 6.0m (41.4m <sup>2</sup> ?)
2号住居址	7.7m × 6.9m (53.13m <sup>2</sup> )
3号住居址	5.3m × 4.3m (23.0m <sup>2</sup> )
4号住居址	5.7m × 4.9m (27.9m <sup>2</sup> )
5号住居址	5.9m × 4.6m (27.4m <sup>2</sup> )
6号住居址	5.3m × 4.6m (24.38m <sup>2</sup> )
7号住居址	6.6m × 5.8m (38.28m <sup>2</sup> )

存在を示唆する。この住居址においてもいったん廃棄された後に再利用されたことを推測できる。土器は、甕と床面直上から刻目突帯を有する完形の壺が出土した。その他に珪質片岩製の紡錘車と石庖丁が出土している。

#### 4号住居址

4号住居址の土層は1号住居址と同様に4層に分層できた。住居構造は、主軸を北西—南東に有し、平面は長方形である。炉は住居址のやや南よりにあり、柱穴などは確認されていない。遺物は、後期前葉に比定される砂型のある甕の脚台の他、甕の口縁部や小型の壺が出土している。石器ではチャート製の打製石鏃・スクレイパーが出土している。またI層とII層の間、II層とIII層の間は、住居址の再利用面と捉えられる。

#### 5号住居址

5号住居址は本集落内で東南端に位置している。土層は3号住居址の場合と同様、4層に分層が可能である。このII層とIII層との間にはかなりまとまった焼土と炭化材が出土し、この面は再利用された生活面と考えられている。住居の構造は、主軸が北々東—南々西で、平面形は長方形である。柱穴は全部で5つ検出されており、住居の西側および東側に、南北にそれぞれ3つ、2つと並ぶ。炉はやはり、住居の中央やや南寄りに位置し、埋土には炭化物を多量に含有する。遺物は、他の住居址同様、甕および胴部に刻目突帯のある壺がみられた。石器では埋土中から、磨製石鏃の未製品と考えられる大量のチャートの石材が出土していることが注目される。また、黒色頁岩製の磨製石鏃の完形品および未製品と、珪質砂岩製の打製石鏃の完形品や紡錘車が出土した。その他、砂岩製の石皿も出土した。また、住居址北東の隅からはベンガラが径10cm程度の円形にまとまって検出された。

#### 6号住居址

6号住居址は、第二次調査の途中の段階まで中央広場付近と考えられていた部分に、新たに検出されたものである。層序は、II層中に2面、II層とIII層の間から1面の炭化物の広がり確認できたため、各々II a層・II b層・II c層とし、再利用面であると捉えられた。住居構造は主軸が西北西—東南東で、平面は長方形である。炉は中央からやや南寄りに位置し、多くの炭化物を含有する。柱穴は確認できず、3基のピットはいずれも性格不明である。出土した遺物は甕の口縁部や胴部および脚部、複合口縁壺の口縁部があり、他の住居址と同様、弥生時代後期前葉のものであった。また、埋土の中から珪質頁岩製の磨製石鏃と打製石鏃、姫島産黒曜石製の打製石鏃が出土した。床面直上からは大量のチャートのチップが出土し、これに伴って1cm程度の大きさのベンガラ塊が見られた。その他チャート製の石庖丁、点紋片磨岩製の磨製石斧が出土した。

(稲田)

## 2. 目的と経過

高畑赤立遺跡は、これまでの調査で弥生時代後期前葉の石器製作址であることが判明している。今回の発掘調査（以下、第三次調査）では、住居の配置や規模または出土遺物の検討を通じて、当遺跡の基本的な集落構造、例えば近藤義郎氏の言う「単位集団」などの把握に主眼が据えられた。また、遺跡の性格の把握に加え、周辺遺跡の集落との関係、つまり「地域的統一集団」や「農業共同体」と呼ばれるようなまとまりの中に、当遺跡がどのように位置付けられるかを考察することを最終的な目的としている。以上のことを念頭に据えて、熊本大学考古学研究室により1994年8月20日から28日にかけて発掘調査が実施された。

第三次調査の手順は（以下、第2図参照）、まず第二次調査時に設定されたグリッドをもとに、第5トレンチ（長さ24m、幅2m）、第6・7・8トレンチ（長さ8m、幅1m）、第9トレンチ（長さ8m、幅2m）を設定し、前回調査で未確認の住居址と、位置的に住居が存在すると疑われる地点を中心に調査した。遺構の位置は前回調査と同様に耕作土である暗褐色シルト層（第1層）を除去し、黒褐色シルト層（第2層）の上面において認定した。第5・6・7トレンチは前回調査で8号住居とみなされた遺構についての確認と、その北側に別の一軒、さらに6号住居に対応する広場の西半部に一軒が検出されることを想定して設定された。しかし、2軒の住居のある広場を取り囲む8軒の住居という当初の予想とは異なり、これらのトレンチから住居は検出されず、ただ第5トレンチより土壌群が認められるのみであった。

また、前回調査の第4トレンチで9号住居とみなされた遺構は、第9トレンチを設定して調査したところ住居址を確認でき、今回の調査の主柱となった。第9トレンチと前回調査の第4トレンチを基準として東西に拡張を行なって、住居址を検出し、完掘した。前回調査の第3トレンチで想定された8号住居が実際に住居ではなく、第2トレンチの7号住居も位置的に住居の存在が考えられないので、この今回調査した住居を7号住居と命名することにした。

第一次・第二次・第三次調査を通じた、当遺跡の遺構検出状況は第2図のとおりである。すなわち当集落址は7軒の住居からなるということが明らかになった。 （今村）



### 三 検出遺構

今回の調査で住居址1軒（7号住居址）、土塼9基が検出された。このうち住居址1軒、土塼4基を完掘した。ここでは7号住居址と土塼についての記述を行う。

#### 1. 7号住居址（第6図、図版2～4上）

##### 位置

本住居址は、前回調査の第4トレンチで確認された（9号）住居址に相当するものであり、遺構配置図のH-19、20、I-19、20、21、J-19、20、21グリッドから検出された。

##### 埋土

埋土の堆積は6層に区分でき、各層の詳細は以下のとおりである。

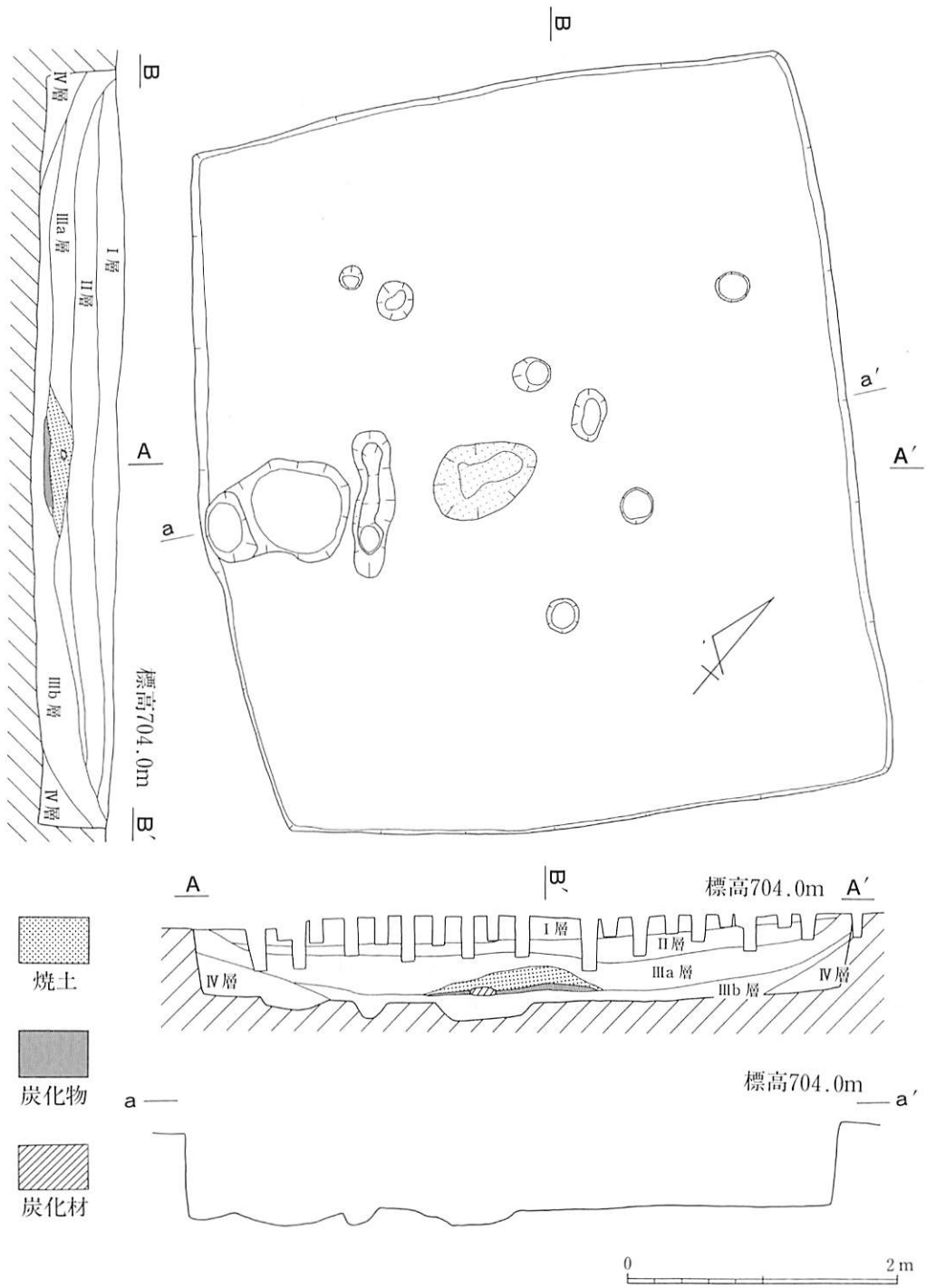
- I層 黒色土層（Hue5YR2/1）。粒子は細かく、粘性は低い、しまりはある。土壌化し、下位のII層に浸蝕している。
- II層 褐色土層（Hue10YR4/4）。粒子が細かく、粘性は低い。しまりがない。
- III層 暗褐色土層（Hue10YR3/4）。粒子は細かく、粘性は低い、しまりはある。焼土の上下でIIIa層とIIIb層に分けた。IIIb層の方がやや粘性が強い。
- 焼土 褐色土層（Hue10YR4/6）。炭化物を含む赤褐色土である。焼土の直下に炭化物のみの層が入る。
- IV層 黄褐色土層（Hue10YR5/8）。粒子は細かく、粘性はややあり、しまりがある。混入物を含まない三角堆積層である。

トレンチャーによる攪乱はIIIa層の上部にまで及び、住居址の壁もこの攪乱のために一部が消失している。IIIb層上面に厚さ20cm弱の焼土のレンズ状の広がりが見られ、さらにこの焼土に伴う形でIIIb層上面に長さ約1.2m、厚さ0.1mの炭化材が出土した他、石皿（第5図-14）・磨石（第5図-13）などの石器の出土が認められている。はっきりとした硬化面は検出されなかったが、IIIa層とIIIb層の間を、住居址の再利用時における一時的な生活面であると捉えることができる。

##### 遺物出土状況

遺物は各層とも少なく、数量などの詳細は以下のとおりである。

- I層 壺または甕の口縁部片9点（第5図-1を含む）、胴部片10点、土器小片4点と陶器片1点
- II層 壺または甕の口縁部片3点、頸部片1点、胴部片13点、脚部片2点、土器小片12点
- IIIa層 壺または甕の口縁部片7点（第5図-2、3を含む）、頸部片1点、胴部片16点、脚部片2点、土器小片3点と被熱した石核1点、被熱した石1点
- 焼土 石皿1点（第5図-14）、磨石1点（第5図-13）、被熱した石片25点（図版6左上の石鏃未製品と思われる被熱した石片を含む）と炭化材
- IIIb層 壺または甕の口縁部片16点（第5図-4を含む）、頸部片6点（第5図-6の工字



第3图 7号住居址实测图

突帯文を有する甕の頸部片を含む)、胴部片34点、甕の脚部片3点(第5図-8、9を含む)、土器小片11点と打製石鏃1点(第5図-10)、黒曜石やチャートの剥片を含む石片12点、軽石1点

この他に、流れ込みの遺物であるが、III a層から高杯の口縁部片1点(第5図-5)が出土した。トレンチャーによる攪乱の中からは、壺または甕の口縁部片1点、胴部片6点、土器小片4点出土した。床面直上からは、チャートのチップが数多見られた他は、遺物は特に出土しなかった。

### 構造

主軸方位は北東-南西で、平面形は長方形を呈している。大きさは長軸が6.6m、短軸が5.8m、床面積は約38.28㎡である。床面はほぼ平坦で、壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。床面から7基のピットが検出されたが、いずれも浅く性格は不明で、柱穴である可能性は低い。炉は住居址の中心からやや南西に位置し、長径は約1.0m、短径は約0.6mの楕円形である。深さは0.15~0.2mで、遺物は出土していない。また、炉と南西側の壁の間に2ヶ所の掘り込みが認められる。この掘り込みの深さは最も深い部分で0.4m程度にまで達し、炉側の掘り込みの中から土器片1点・石片1点出土した。この土器片は流れ込みによるものと考えられる。なお、これらの掘り込みの性格は不明である。

## 2. 土壙(第4図、図版5)

土壙は前述のように、9基が検出され、前回調査の3号住居址の1号土壙につづけて北から2号~10号土壙と名付けた(第4図参照)。そのうち完掘した土壙は、L-9グリッド所在の3号土壙、L-11グリッド所在の7号土壙、L-14グリッド所在の9号土壙、L-14および15グリッド所在の10号土壙の4基である。これらのうち3号土壙、9号土壙、10号土壙は遺物が出土せず、性格も不明である。ここでは、遺物の出土した7号土壙について記述する。

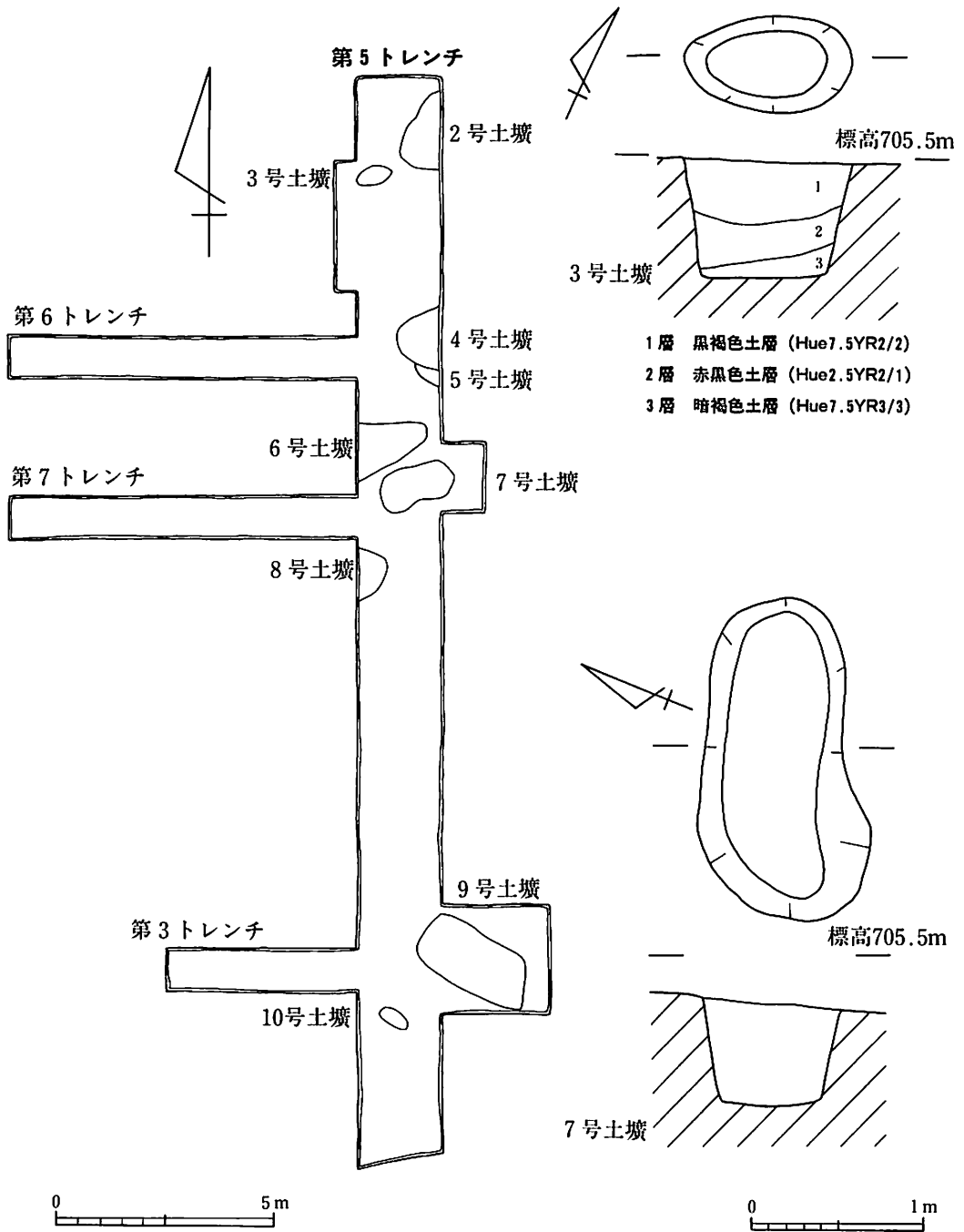
### 7号土壙(第4図、図版5下)

7号土壙はL-11グリッドに所在する。肩の部分の形状は不定形で、主軸方位は東北東-西南西方向、長軸は約1.6m、短軸は約0.8m、深さは約0.8mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれていて、底面は平坦である。

埋土は赤黒色(Hue2.5YR1.7/1)の一層のみで、粒子は細かく、粘性はあるが、しまりは無い。混入物もみられない。

遺物は縄文時代早期の塞ノ神式と思われる土器片が2点、黒曜石片が1点出土している。これらは流れ込みの可能性が強く、7号土壙の時期を決定するものとは考えにくい。また、この土壙の性格も不明である。

(岡部)



第4図 第5トレンチ検出土塚実測図

## 四 出土遺物

出土した土器には縄文土器・弥生土器があり、石器には打製石鏃・磨石・石皿・石核・剝片がある。第5トレンチの7号土壌から縄文土器片が、住居址内からは甕・壺・高杯の弥生土器片や石器類が出土した。また、表面採集によって縄文土器片・弥生土器片・打製石鏃が得られた。

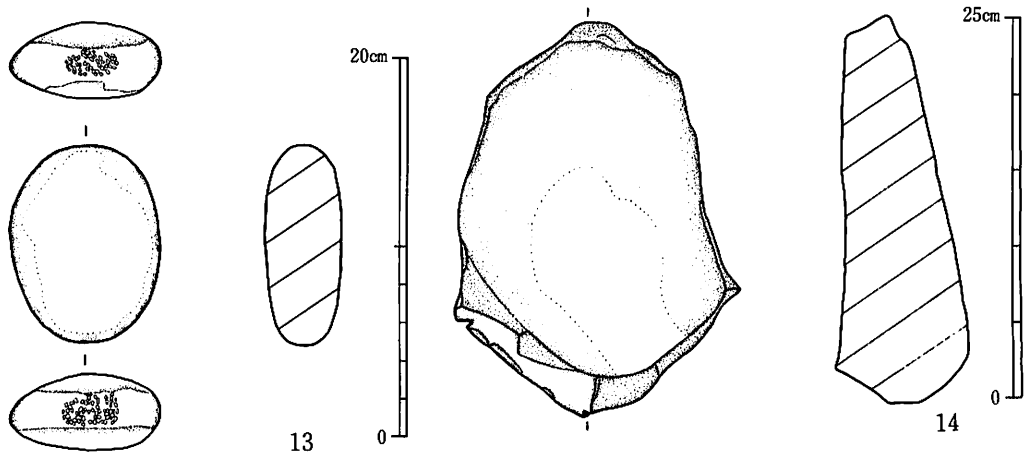
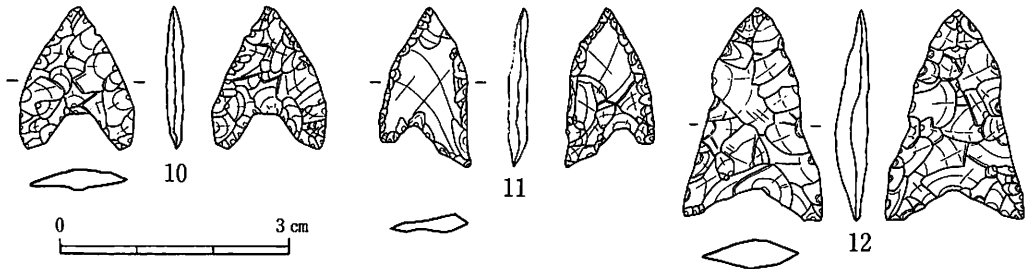
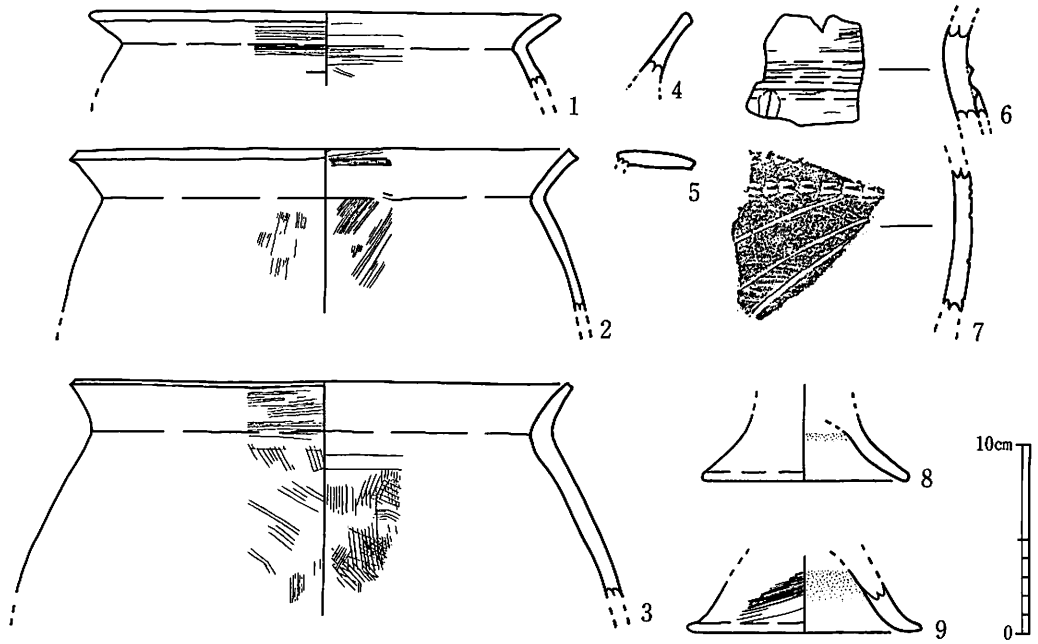
第5図-1～3は甕の口縁部の破片である。1は口縁部が「く」の字に外反し、外器面は横方向にハケ目調整を行なった後、横方向のナデがなされている。また、口唇部から下方に約1.7cmの範囲にススの付着が認められる。内器面屈曲部は明瞭な稜を有し、横・斜め方向にハケ目調整をした後横方向のナデが施される。胎土には長石、石英、黒雲母、金雲母が含まれ、焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。2は口縁部が「く」の字に外反し、外器面は磨耗が激しいため詳細は不明であるが、くびれ部を境に上部はヨコナデがなされ、下部は斜め方向にハケ目調整がみられる。内器面はくびれ部を境に上部には横方向にきめの細かいハケ目調整がみられ、下部は上部とは別のハケ目調整を斜め方向に施している。胎土には長石、石英、黒雲母、金雲母、直径6mm前後の角礫が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈する。3は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部が緩やかに外反し、くびれ部から口唇部にかけては横方向のハケ目調整が行なわれた後ヨコナデが施されており、くびれ部から下方にかけては横・斜め・縦方向にハケ目調整が行なわれた後ヨコナデがなされる。内器面はくびれ部を境に、口唇部はヨコナデ、くびれ部から下方にかけてはハケ目調整を横・斜め・縦方向に行ないその後部分的にヨコナデが施されている。またくびれ部から下方に約2cmにわたってヘラ磨きがみられる。胎土には長石、石英、黒雲母、金雲母が含まれ、焼成は良好で、橙色を呈する。

4は壺の口縁部の破片である。外器面は横方向にハケ目調整が行なわれた後ヨコナデを施し、内器面はヨコナデ調整である。胎土には長石、石英、金雲母が含まれ、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。

5は高杯の口縁部の破片である。外器面はハケ目調整の後ヨコナデがなされ、内器面から口縁部先端にかけて研磨される。胎土には長石、石英、黒雲母、金雲母が含まれ、焼成は良好で、明褐色を呈する。

6は頸部に二条の突帯が巡り、縦に一条下垂する甕の頸部の破片で、いわゆる「工字文突帯粗製甕」である。外器面はハケ目調整が行なわれた後ナデ調整が施されている。内器面はナデ調整が施され、所々に指圧痕が残る。胎土には長石、石英、黒雲母、金雲母、1～3mmの角礫が含まれ、明褐色を呈する。他の土器と比して器壁が厚く堅固である。

7は第5トレンチの土壌より出土した塞ノ神式土器である。外器面には貝殻条痕紋、沈線紋が刻まれており、内器面は横・斜め方向にハケ目調整の後に指ナデによって消されている。胎土には長石、石英、黒雲母、3mm内外の礫が含まれ、焼成は良好で、外器面は黒褐色、内器面は暗灰黄色を呈する。



第5図 7号住居址出土遺物実測図

(石鏃 1/1 土器・磨石 1/4 石皿 1/5)

8・9は甕の脚部片であり、内器面に砂型が認められる。8は外器面、内器面ともに横方向にハケ目調整の後ヨコナデが施される。胎土は緻密で、長石、石英、黒雲母、金雲母を含み、焼成は良好で淡黄色を呈する。9の外器面は横・斜め方向のハケ目調整の後にヨコナデで調整されており、内器面は横方向のハケ目調整の後にヨコナデがなされている。胎土は緻密で、長石、石英、黒雲母、金雲母を含み、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。

出土した石器には打製石鏃・石皿・磨石・石核・剥片がある。第5図-10・11はチャートを材料とする凹基無茎式の打製石鏃であり、平面形態は二等辺三角形を呈する。10は押圧剥離による交互剥離によって刃部が作られており所々に細部調整の痕が見られる。重量は、0.67gである。11は全体を成形した後に側縁部に押圧剥離を施して調整を行なっている。基部に見られる偏った剥離は成形時に生じたと思われる。重量は、0.59gである。12は頁岩を材料とする凹基無茎式の打製石鏃であり、重量は1.61gを量る。平面形態は二等辺三角形を呈する。交互剥離によって刃部が作られており、稜が若干擦り減っているのが観察される。これらの打製石鏃のうち住居址内より出土した遺物は10のみであり（Ⅲb層）、11・12は表採遺物である。

13は円礫を利用した安山岩製の磨石である。磨石としての使用面は二面あるが敲石としても使用されたために円礫の両端に敲打痕を有する。重量は、0.5kgである。

14は安山岩製の石皿である。使用面は三面存在し、その内の一面は特に利用され、皿状に磨りへっている。この石皿は住居址の炭化物の面において13の磨石とともに出土している。なお、重量は20.6kgである。

また実測図は挙げなかったが、Ⅱ層より姫島産黒曜石の剥片・Ⅲa層より被熱したチャートの石核・床面直上よりチャートの剥片が数多出土している。（吉岡）

層位	I	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅲ b上面	表採	7号土壙
第5図 土器	1	2 3 5	4 6 8 9			7
第5図 石器			10	13 14	11 12	

## 五 ま と め

### 1. 高畑赤立遺跡の性格

高畑赤立遺跡においては、あわせて7軒の竪穴住居址が検出された。7軒の住居址から出土した土器によって比定される年代は、玉永光洋氏<sup>1)</sup>に依拠すると次のようになる。まず、1・2・5号住居の床面直上の資料から、壺については頸部が大きくくびれ、口縁部がゆるく外反するものが多く「肥後型壺」B類に相当することが分かる。甕については頸部がくびれ、口縁部がゆるく外反するものが多く、その大部分に脚が付くと思われるため「肥後型甕」C類に分類される。さらに、頸部または胴部に断面三角形の突帯や刻目突帯を有する壺があり、甕の脚部に砂型が認められる。以上を総合すると当遺跡の土器の年代は、玉永編年の後期I期（後期前葉）に比定される。埋土においては壺や甕の器形を観察したところ、床面直上の資料と年代的な隔たりは見受けられない。従って、当遺跡は同時性のある7軒の住居からなる集落址であることが判明した。

集落構造について分析を進めると、各住居は長方形プランの竪穴住居であり、主軸を北東－南西方向に有し、南西壁沿い中央に炉が位置するという点で共通性を持つことが分かる。さらに、各住居がほぼ当間隔に建てられ、全体として環状に配置される構造をとり、7軒の住居が一つのまとまりをみせて存在する。しかし、2号住居については他の6軒の住居とやや空間を隔てて建てられ、集落内で最大規模を有していることと考えあわせると特別な住居であったことが窺える。また、6号住居は他の1～5・7号住居に取り囲まれ、立地的に特殊である。住居配置の面から、2号住居、1～5・7号住居、6号住居という3グループに分けられる。

次に、当遺跡では埋土の堆積層に数次にわたる住居利用の痕跡が見受けられる。これらの埋土のうち最下の堆積層は、おそらく周堤の土が住居の廃棄後に崩壊し住居内に流れ込んだものであろう。再利用時には、この流れ込んだ土の上面を新たに床面とすることが行なわれ、簡単な再利用が行なわれたことが分かる。住居の再利用は、トレンチャーによる破壊のために各住居で何回行なわれたかは判然としないが、比較的残存状態のよい6号住居においては少なくとも4回の再利用が認められる。このような再利用は、土器の年代観によると時期的に大きな差は見受けられないため、短期間のうちに行なわれたと考えられる。さらに今回調査された7号住居址のⅢb層上面のように硬化面が明確に検出されない場合があることは、住居が一回の使用においても短期的にしか利用されなかったことを示唆している。つまり、第二次調査の所見のとおり、赤立遺跡はさほど定着性の強い集落ではなく、短期間のうちに繰り返し利用される居住形態<sup>2)</sup>であって、7軒の住居が同時併存で断続的に利用されたと考えられる。また、7号住居址のように、床面からチップ以外の遺物が出土しない場合があることは、住居が意図的に廃棄されたことを示している。

床面および再利用面で出土した石器を観察すると、打製、磨製石鏃、砥石、石皿、磨石、紡錘車、石庖丁などの完成品・未製品、その他に石材、剥片がある。前回調査ですでに石器製作



址である可能性が指摘され、石材については当遺跡の10km圏内で入手でき、石皿には安山岩、砥石には砂岩、磨製石鏃にはチャート・輝緑凝灰岩、石庖丁と紡錘車には珪質片岩やチャートなどと石器の種類によって石材選択が行なわれていたことが推測されている<sup>(3)</sup>。また、これらの出土状況から、ある程度の石器製作工程の復元が可能である。6号住居址では、磨製石鏃などの製作に伴うチャートの石核や碎片などが多く検出され、磨製石鏃の素材剥離と細部調整が行なわれたと想定される。従って、6号住居址は石器製作の過程において機能的に異なった役割を担った作業場であることが復元できる。この点に関しては今後より一層の検討を待ちたい。

また、完形品の出土数が少ないことは製品を搬出していったということを示唆するものであり、前回調査でも磨製石鏃や石庖丁、紡錘車の搬出について触れられている<sup>(4)</sup>。そのうち磨製石鏃については、色調や形状（頁岩製の石鏃）ともに無茎の鉄鏃に類似するため、鉄鏃と同じ威力を期待して、入手が容易な石材によって代用品として製作されたと考えられる。石鏃自体は無茎式であり、有茎式のものは見受けられない。村上恭通氏<sup>(5)</sup>は、阿蘇外輪山東麓の地域で鉄鏃が有茎式に、石鏃が意識して無茎式に製作された可能性を示唆している。さらに、これらに対し阿蘇外輪山西麓のやや平野部に近い地域の西弥護免遺跡や二子塚遺跡では磨製石鏃をほとんど出土せず、鉄鏃のなかで有茎対無茎が1：1に近い比率であることを指摘されていることは注目すべきことである。従って、当遺跡の磨製石鏃の搬出先は阿蘇山一帯およびその東辺に限られ、また平野部の鉄器生産を意識した石器製作が行なわれていたことが窺える。

一方、打製石鏃は、磨製石鏃が搬出用であるのに対して、当集落の構成員用であったものと考えられる。石庖丁や打製石鏃などの農耕具の出土もみられ畑作の可能性を思わせるものの、石器の中で石鏃の出土割合が高いことは石皿と磨石が存在することと加えて、当集落が平地の弥生時代後期のあり方とは異なり、縄文時代的な生業活動を主体とし続けていたことを推測させる。当時の生活を復元すると、石器製作を行なうために石材の入手に都合のよい当地に春から秋にかけて居住し、石器製作のかたわら畑作と狩猟採集を行い、生活が厳しくなる冬期は当地を去ったと考えられる。住居が連続的に使用されなかった背景には、こうした季節的な居住があったのであろう。

阿蘇外輪山の裾野に発達した高原状の台地、大野川上流域・五ヶ瀬川上流域を中心とした地域では、弥生時代後期に遺跡が増加し、一般的な弥生土器の壺・甕・高杯・鉢という器種構成ではなく壺・甕が圧倒的に多く、粗製甕（工字文突帯甕）や複合口縁壺といった独特の土器が盛行する。このことは様々な研究者によってすでに指摘されてきたことである。高畑赤立遺跡で工字文突帯甕や複合口縁壺の出土をみたことは、当遺跡の立地からみても大野川上流域や五ヶ瀬川上流域の地域との関係が密接であったことを示している。一方、住居址において肥後型の範疇に入る壺・甕の出土をみたことは、熊本平野部をはじめとした西方との交流関係を表していよう。当地が東九州と中九州との交流において中継点の一つであったことが窺える。

## 2. 弥生時代集落における位置

高畑赤立遺跡が、弥生時代の集落においてどのような位置にあるかを分析するにあたって、一般に弥生時代の集落の把握のされ方をみる必要がある。ここでは、集落研究のうち主立った論致を取り上げて、高畑赤立遺跡の位置を考察する手がかりとしたい。

弥生時代の集落址については、多数の研究者によって様々なことが言われてきた。沼遺跡や紅苜山遺跡といった小住居群には、収穫物の貯蔵を窺わせる高床倉庫が1～2軒存在し、個々の住居に壺・甕・砥石・紡錘車・石器剥片などが認められる。この小住居群のことを、近藤義郎氏<sup>6)</sup>は近親集団を基礎とした「単位集団（家族体）」と呼び、さらに水利を軸とした共同体的上部機構として各作業単位（経営単位）に一定の規制を加える共同体的機構（地域的統一集団）の存在を指摘された。都出比呂志氏<sup>7)</sup>も、小集落をいくつかの世帯を含む農業経営の基礎単位であるとして血縁関係の強い集団「世帯共同体」とし、その小集落（世帯共同体）が他の近隣の小集落とともに大塚遺跡や池上遺跡のような大集落を核にした「農業共同体」の枠に組み込まれるという見解を示されている。

このように弥生時代の集落は、社会組織と関係づけられ、おおよそ水稲耕作の労働編成の基礎単位またはその単位の集合体として捉えられている。小住居群を基礎として消費生活・生産活動・生産物の共同管理が行なわれ、大集落（いくつかの単位集団を内包している）が、周囲の小集落を統括して水路・水田の造成、配列、維持、利用を制御したと想定される。当遺跡の存在する中九州山岳地帯では阿蘇谷を除いて、弥生時代は水稲耕作が行なわれた痕跡は認められない。当地方においても、このような労働編成の基礎単位が当てはまるかという問題も含めて考えていきたい。

当遺跡の性格を位置付ける上で、武末純一氏<sup>8)</sup>の稲を作るムラ・山のムラ・海のムラの論致は大変参考になるものである。武末氏は弥生時代の集落を、農村・山ムラ・海ムラの3種に分け、そのうち農村については、「単位集団」や「世帯共同体」と呼ばれる農耕に依拠した数軒の住居群からなる家族的集団と、いくつかの「単位集団」（＝周辺集落）を内包する地域の核となる大集落（＝拠点集落）という構造からなることを言われている。山ムラ・海ムラは、水稲耕作が困難で他の生業活動を主体とした軍事的色彩の強い高地性集落を除いた、山の遺跡や海の遺跡のことである。このうち山の遺跡は、拠点集団の山に関わる生業を切り離し増大する人口圧を緩和することを目的としたムラ（サト山ムラ）と、平野部と離れて一応別個の世界を形成し縄文時代とほとんど変わらない狩猟・採集主体の生活を送るムラ（オク山ムラ）の2種があり、後者は農村社会に吸収されサト山ムラと化すことがある。武末氏によって、この傾向が阿蘇谷で見受けられることが指摘されている。阿蘇谷においても水稲耕作の存在が想定されていることはその証左である。また、大野川上・中流域の高原台地において大々的にオク山ムラが展開され、その台地上に拠点集団・周辺集団がともに存在していることも指摘されている。

以上の論致に依りながら、高畑赤立遺跡をみていくことにする。先程2号住居、1～5・7

住居、6号住居の3つの区分を行なった。小集落中の一軒の大型住居については、甲元眞之氏<sup>9)</sup>が論じられるように、石器などの製作場、共同祭祀の場、宝物の保管場所という機能があると思われ、集会場・共同作業場の性格が推定される。高畑赤立遺跡の場合は2号住居がこの大型住居に相当し、集会場の役割をもち、共同作業場としての機能は6号住居にあったと考えられる。6号住居は普通の住まいではなく、特別な機能を持つ建物であった。また、他の住居には炉があること、壺・甕といった土器のセットが検出されることから、それぞれ自立した消費単位であったことが分かる。さらに、石器製作の工程上の分業が行なわれたことは、住居配置に規制があることに加えて、この集落に共同体的まとまりがあることを示している。

都出氏<sup>10)</sup>の論考を借りると、農耕へ投入すべき労働量の増加と石器の需要の高まりは、石器生産の能率化を必要とし、このような共同体間交易を生み出した。当地において、「地域的統一集団」の内部でこのような共同体間交易が成立していたならば、当遺跡が石器を搬出していることは、当遺跡が周辺集落として「地域的統一集団」の分業体制のもとに石器製作の一部を担っていたことを窺わせる。また、高畑赤立遺跡において打製石鏃や石皿・磨石、石庖丁の出土がみられたことは、狩猟・採集や畑作が行なわれていたことを意味している。つまり、当遺跡は「地域的統一集団」の一部をなし、ある程度自立的な生業が行なわれる「単位集団」であったことを示している。当遺跡は農業を中心に営む「本村」から季節的に訪れる仕事場であり、縄文時代以来の生業と畑作を並行して行なうことで、ある程度自立的に生活を維持し、そのかわり地域的統一集団内の分業の一環として石器製作が行なわれたと捉えることができる。さらに、中九州山岳地帯において一般的に壺が煮沸具に用いられ、甕が貯蔵用と一部煮沸用に使われることが言われている<sup>11)</sup>。肥後型の壺・甕や工字文突帯甕・安国寺式複合口縁壺などの外来系の土器を受け入れるものの必ずしも用途まで同じではないことは当遺跡の独自性を表している。当遺跡の所属する「本村」の性格を知る上で、重要な要素となるのではないか。

石器製作址は、第1図のように外輪山南東部では蘇陽町高畑赤立遺跡、同高森町前畑遺跡(27)、柿迫遺跡(29)、宮崎県高千穂町薄糸平遺跡(30)、押方C遺跡(31)など、外輪山の外部では西原村谷頭遺跡(1)がある。大野川上流域の菅生台地では竹田市石井入口遺跡(14)や同小園遺跡(15)、荻町古賀遺跡(20)など11遺跡が知られる<sup>12)</sup>。また、詳細は明らかではないが、阿蘇谷においては外輪山山麓部に石器を製作する遺跡の存在が言われている<sup>13)</sup>。以上、石器製作址は外輪山南東部や大野川上流域に多くみられ、弥生時代後期の遺跡がほとんどである。しかし、これらの詳細な年代については不明な点が多いために、石器製作址間の関係を復元することは今のところ困難である。ただ、谷頭遺跡は中期末葉、高畑赤立遺跡は後期前葉、前畑遺跡は後期後半という年代が判明している。外輪山西部では後期に鉄器が盛行することを考え合わせると、需要の変化に応じて石器製作の拠点が東方へ移されていったと捉えられる。

一方、大野川上流域では、「地域的統一集団」内で分業が行なわれず、各集落単位で自給的に製作されている<sup>14)</sup>。磨製石鏃の素材をみると、外輪山南東部の地域がチャート・輝緑凝灰

岩であるのに対し、菅生台地では結晶片岩・頁岩であり、お互いの地域間で石器や石材の移動は認められない。第1図が示すように、磨製石鏃の製作址は外輪山南部に限られるのに対し、カルテラ平坦面や外輪山西部には完成品のみがみられることから、外輪山南部の石器製作址の製品が、カルテラ平坦面や外輪山西部の稲作を営む集落に搬出されるという関係が考えられる。これらの遺跡を包括する「地域的統一集団」の領域においては、石器に関して完全に分業体制が整えられていることが分かる。このように石器製作の在り方については大きな差があり、異なる2つの「地域的統一集団」が阿蘇の熊本県側と菅生台地に展開していたことが窺える。このように、高畑赤立遺跡は蘇陽町において弥生時代後期前葉でありながら、縄文時代的生活要素を留めて、稲作栽培民との共生を果たした最後の遺跡として重要な意味がある<sup>(15)</sup>。当集落の「単位集団」の属する「地域的統一集団」の拠点集落の確認は、この地方における「地域的統一集団」の在り方を知る上で重要であり、その所在地と性格の調査は今後の課題であろう。

(今村)

註

- (1) 玉永光洋「豊後における肥後型土器について」『九州考古学』第57号 1982年  
その他、武末純一「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年にも依拠している
- (2) 山田康弘「高畑赤立遺跡」研究室活動報告 29 熊本大学考古学研究室 1994年
- (3) (2)に同じ
- (4) (2)に同じ
- (5) 村上恭通「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第3号 1992年
- (6) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻第1号 1959年  
「弥生時代論」『岩波講座日本歴史』1 1962年  
「前方後円墳の時代」岩波書店 1983年
- (7) 都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史』1 東京大学出版会 1970年  
「農耕社会の形成」『講座日本歴史』1 東京大学出版会 1984年  
「国家形成期における階層化とムラ」『日本民族社会の形成と発展』山川出版社 1986年
- (8) 武末純一「山のムラ、海のムラ」『古代史復元』4 講談社 1989年
- (9) 甲元眞之「農耕集落」『岩波講座 日本考古学』4 1986年
- (10) 都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史』1 東京大学出版会 1970年
- (11) 山下志保「熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡—中九州山岳地域の弥生時代をめぐって—」『九州考古学』第67号 1992年  
甲元眞之「地域と中核地帯—弥生時代の北部九州を例として—」『考古学研究』第36巻第2号 1989年
- (12) 玉永光洋「高原の弥生文化」『大分県史』先史篇Ⅱ 1989年
- (13) 阿蘇町教育委員会「史料阿蘇」1978年
- (14) 玉永光洋「高原の弥生文化」『大分県史』先史篇Ⅱ 1989年
- (15) 竹村卓二「《客民》考—東アジア民族における山地生活民の社会共生の一面面」『民族学から見た日本』岡正雄教授古稀記念論文集 河出書房新社 1970年

参考文献

- 河村好光「弥生ムラ・古墳づくり・律令国家—共同体と個別家族—」『考古学研究』第37巻第4号 1991年
- 甲元眞之「海と山と里の文化」『えとのす』22 1983年
- 甲元眞之「海と山と里の形成」『考古学ジャーナル』344 1992年

- 後藤宗俊「弥生時代のイエについての覚書—集落跡からのアプローチの試みとして—」『岡崎敬先  
生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』中 同朋舎 1987年
- 後藤宗俊「菅生台地の集落跡 弥生時代終末の集落と生業」『えとのす』29 新日本教育図書  
1985年
- 下條信行「村と工房」『古代史復元』4 講談社 1989年
- 清水宗昭・玉永光洋「大野川上流域の古代文化」『えとのす』22 新日本教育図書 1983年
- 高倉洋彰「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会 1975年
- 田中義昭「弥生時代における耕地と集落」『新版 日本考古学を学ぶ』(3) 有斐閣 1979年
- 北郷泰道「祖母・傾山系山岳地域論序説—空白の過渡期をめぐる—」『考古学研究』第25巻第3  
号 1978年
- 北郷泰道「祖母・傾の南 その考古学的世界」『えとのす』22 新日本教育図書 1983年
- 北郷泰道『熊襲・華人の原像』吉川弘文館 1994年
- 和島誠一「農耕牧畜発生以前の原始共同体」『日本考古学の発達と科学的精神』和島誠一著作集刊  
行会 1973年